

行政視察報告書

■目 的

久喜市の授業時数特例校制度を活用した独自の取組、宇都宮市の郷土愛の醸成を目的とした宇都宮学についての調査

■訪問都市

埼玉県久喜市、栃木県宇都宮市

■期 間

令和6年11月14日（木）から11月15日（金）まで 2日間

高松市議会

<自由民主党清新会>

派遣議員名簿

会長 山下 誠

副会長 辻 正彦

坂下 且人

小松 由美

松熊 秀樹

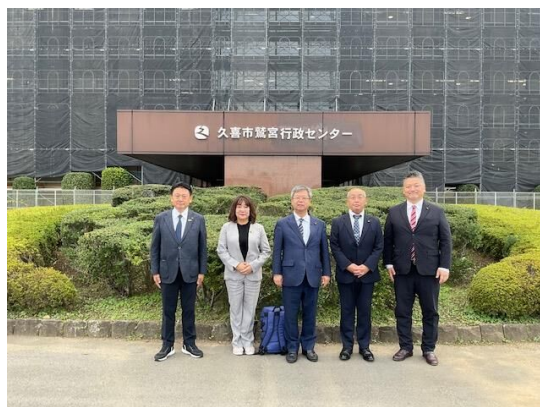
用務の経過と結果及び所感

1 埼玉県久喜市（11月14日）

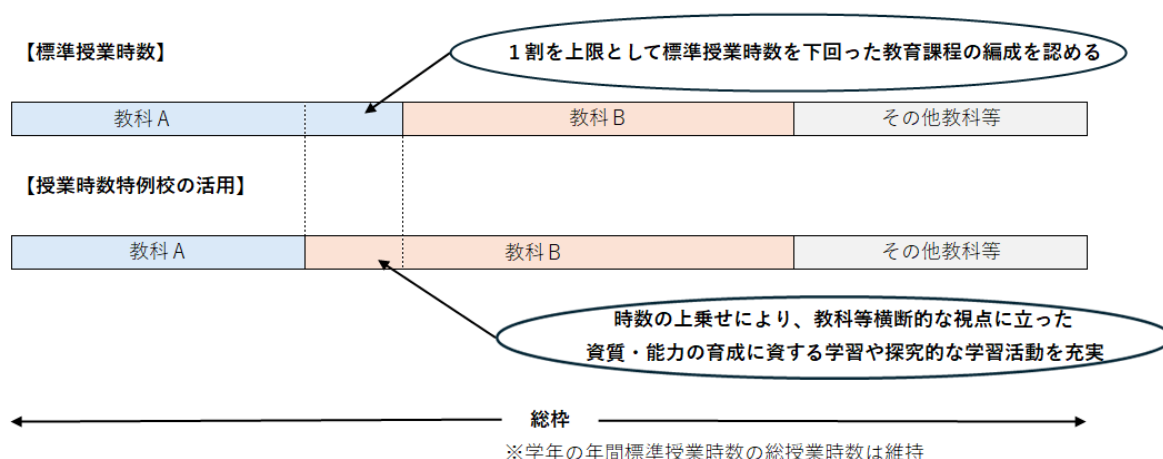
（A）授業時数特例校制度を活用した独自の取組

（1）授業時数特例校制度とは

文部科学大臣が、学校教育法施行規則第55条の2等に基づき指定する学校において、学校や地域の実態に照らし、より効果的な教育を実施するため、総枠としての授業時数（各学年の年間の標準授業時数の総授業時数）は引き続き確保した上で、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成や探究的な学習活動の充実等に資するよう、カリキュラム・マネジメントに係る学校裁量の幅の拡大の一環として、教科等の特質を踏まえつつ、教科等ごとの授業時数の配分について一定の弾力化による特別の教育課程の編成を認める制度。



【イメージ】



全体の授業時間は維持したまま、決められた教科の中で授業数を増減させ、独自の授業を行うことができる制度により、学校裁量の幅が拡大され、各校・各地域の特色を生かした特別な教育課程を実施できるようになった。

【充実する学習内容の例】

- ・学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見 等）の育成
- ・現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成（伝統文化教育、主権者教育、消費者教育、郷土・地域教育、食育、安全教育 等）

（2）久喜市授業時数特例校申請

令和4年度 準授業時数の1割を上限として市内2校（久喜小・小林小）からスタート。

5年度～ 文部科学省「授業時数特例校」市内全小・中学指定（31校）

★探求的な学びの充実に向けて・・・

- ①STEAM化された学びの推進
- ②PBLを軸とした探求的な学びの充実
(縦割り探求・学年探求)
- ③教科横断的な学びの推進
- ④学びを発信、共有、交流
- ⑤テクノロジーの善き担い手を育む(デジタル・シティズンシップ教育の推進)

(3) 情報発信について

- ・各学校ホームページに取組概要を掲載
- ・久喜市ジュニアICT育成講座による、各学校のICTリーダーとなる児童生徒の育成(令和6年度までに、174名を認定)
- ・探求的な学びの発信の機会に向けて、学びの発表の場として「ジュニアプレゼン AWARD IN KUKI」の開催(予定)

(4) ALLKuki教育改革プロジェクト

久喜市では以下の3つの柱で教育の充実を図っている。

①次代の世界で活躍する「未来を拓く力」を育みます

(英語教育)

- ・小学校の全ての外国語の授業にALTを配置
- ・英語検定受験料補助(市内在住または市立学校に通う中学校2、3年生を対象)
- ・「English Camp」の開催

(SDGsに向けた取組)

- ・大学と連携したSDGs学習
- ・SDGs実践計画の作成
- ・SDGsに向けたチームプロジェクト学習

(体力の向上)

- ・久喜市小学校陸上競技大会

(健康・食育の推進)

- ・栄養教諭との連携した食育授業

(幼・保小中一貫教育)

- ・幼・保小連携3年保育実施
- ・中学校教員の小学校への兼務発令

②人とともに生きる「豊かな感性・尊重する心」を養います

(人権教育)

- ・「人権感覚育成プログラム」の活用

(郷土愛を育む教育)

- ・「くき検定」の実施(今年で7回目)

(安全教育)

- ・学校・家庭・地域がいっしょに考える災害図上訓練(DIG)
- ・防災ボランティア体験活動

(特別支援教育)

- ・インクルーシブ教育の充実

(充実した教育相談)

- ・面談相談室の開設、就学に向けての相談
- ・学校相談員、心理専門員、スクール・カウンセラー、スクール・ソーシャル・ワーカーの配置

(適応指導教室)

- ・指導員、相談員の配置
- ・S S W、心理専門員の配置
- ・不登校児童生徒支援
- ・市内4か所に教育支援センターを設置

③「絆を深め、地域社会と連携した教育」を推進します

- ・全校への「コミュニティ・スクール」設置
(平成28年から月1回または2カ月に1回程度、各校区ごとに学校運営協議会を開催している。)
- ・親睦を深めるスポーツ交流
- ・地域のよさを広めるための映えスポット♡ フォトコンテスト
- ・地域の事業所等での社会体験
- ・放課後に地域の方が勉強を教える「くき本樹塾」(中学生対象)
- ・放課後子ども教室 ゆうゆうプラザ
(地域の方々を中心となって子どもたちに様々な体験と放課後の安心な居場所を提供している)

(5) 久喜市ICT教育のコンセプト

教育DXを見据えた、実現を目指す「学びの姿」

★子ども一人一人を主語とする学び

- ・学びの複線化を通じた個別最適な学びの推進
- ・子ども達自身が、学びを自己調整できる力の育成
- ・STEAM化された学びから、STEAM教育の推進へ
- ・PBLを軸とした探求的な学びの充実
- ・授業・校務でのクラウドツールフル活用を通じた働き方改革と教育DXへ

(6) ICT教育の取組について (R2年～)

「教育DXに向けた久喜市版 未来の教室」

4 + 1 のコンセプト

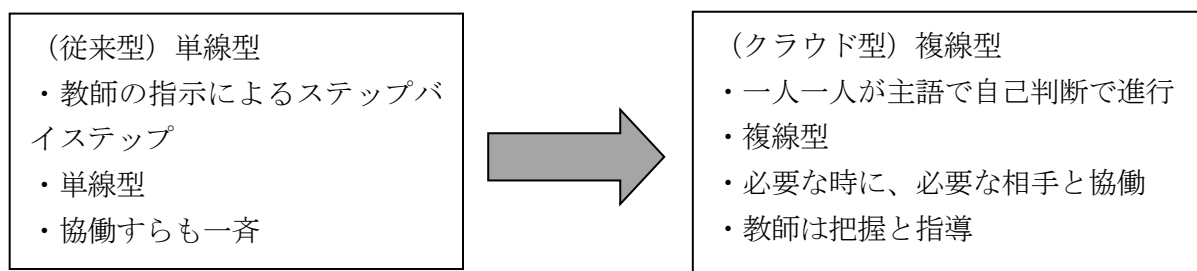
1 時間・距離に制約されないオンライン教育の実施

- ・日常から現実の教室とクラウド上の仮想教室 Google Classroom を連動させているため、非常事態でも、速やかにオンライン授業に移行できる。
- ・Meet などの Google ツールを使用して、国内外問わず、他の学校・地域・企業等とつながった学習が行うことができる。
- ・「久喜市共同オンライン分教室」の設置(中学校に登校することが困難な生徒への Google Classroom、GoogleMeet、AI 型学習ドリルを活用した同時双方向型の授業)

2 客観的・継続的データに基づく個別最適な学びを提供

- ・子ども一人一人を主語とする学びの推進。

クラウド活用を基盤とした学習者主体の学びへ



- ・学びの手引きを基に学習過程を共有（指導案を子どもと共有する）
- ・ループリックを示し、学びのゴールを明確に（学習の成果を客観視・自己の伸びを評価する視点）
- ・多様な学び方を保障する。（活動場所、形態も選択、委ねる）
- ・教師が授業を調整＜子供が学習を調整（参照・共有しながら学ぶ）

3 汎用的な能力を養うSTEAM化された学びを提供

- ・文部科学省研究開発学校の指定を受けて、科学技術教育に特化した新設教科「夢創造科」を開発し、実施。（平成 25～28 年度）
- ・地域や企業等と連携して社会とつながる問題解決的な学習の実施
例）「オリジナルエコバック作り」with 理想科学工業
- ・STEAM教材の活用（アイロボット「Roomba」、ドローン、3Dプリンター等）

4 総合型アプリケーションによる校務の効率化を実現

+ 1 ICTを使いこなしつつ、人間教師の良さを生かした学びのコーディネーターたる教師を育成

- ・Google for Education 教職員向け各種研究会の実施
（新規採用、転入教職員、育休明け教職員も受講し、誰一人取り残さない研修体制）
- ・市内全校推進リーダー育成のための研究委員組織体制
（市内 31 校から各 1 名、推進力となる教員が参加することで各校の中核となる教員育成、取組を全校で共有する仕組み）
- ・学校情報化認定に向けたチャレンジ（市内 16 校認定）
（学校情報化の進捗実感、次の課題に向けた取組へ）

(B) 主な質疑応答

①久喜検定の内容は誰が考えているのか。

→教員が考えているが、今年度から問題作成として携わる小中学生もつくっており、問題作成をしてもらう機会を広げている。ただ、簡単すぎる問題だといけないので、担当課にも難しい問題を考えてもらっている。

②幼保・小・中の連携の認識があまりないが、どのように連携をとっているのか。

→公立の幼稚園 2 校に関しては地元の小中学校と連携をとっており、継続的に学びをつなげている。また、スタートプログラム等、職員が年に数回集まって打ち合わせをしながら進めている。

③放課後に地域の方が教えるくき本塾は誰かキーパーソンがいたのか、少しずつ広がっていったのか、それとも一斉にやろうということになったのか。

→平成 29 年に市内の一部の中学校（3 校）で先行的に始めて、30 年に市内全中学校で県や国の補助金を受けながら実施している。年間 30 回の実施で放課後に 1 回約 2 時間、学習支援員へ委嘱している。実際は元学校の関係者、教職を目指す大学生などが支援員として活躍している。



④支援員をそろえるのは大変だったのではないかな。

→ご理解いただく難しさはあったが、退職なさった方で力を発揮できる方がたくさんいたので支援員として、活躍していただいている。ただ、今後の課題として、人材をどう集めるか課題だと考える。スタート時から継続されてる方がほとんどのため、60 歳から始めた方も 70 歳となってまだ継続してくださる方もいるが、課題は残る。

⑤授業時数特例校制度を申請しなくても S T E A M 教育自体はできるのではないかな。
関連性はあるのか。

→制度を利用しなくても授業はできるが、教員の授業・意識を変えるきっかけとして、自由に使える時間を確保することで、もう一度、この時間が子どものために何ができるか、教師自らが考えることで動くきっかけとなると考え、申請へと動いた。

また、教科書の問題から問いを見つけ出すのは大変だが、今、社会にある問いが何かを考える力が求められるため、先生が問題意識を持ち、子ども達に問題意識を持たせ、子ども達が問題を持って解決していく「気づき・考え・行動する」の「気づき」を大切にしたいと思っていることも申請へのきっかけとなった。

2 栃木県宇都宮市（11月15日）

(A)宇都宮市の郷土愛の醸成を目的とした宇都宮学について

(1) 宇都宮市の方針と現状

【第2次学校教育推進計画】

目標：「未来を生き抜く力を養う」

目指す児童生徒の姿：児童生徒は、他国の
人々や文化に敬意を払いながら、郷土・宇都宮や日本の伝統・文化に愛情と誇りをもつとともに、英語を使って外国人とコミュニケーションを積極的に図ろうとする態度を身に付けている。

【参考】宇都宮へ愛着や誇りに係る調査

「はい」の割合	H25	H26	H27	H28	H29
宇都宮に愛着がある市民	67.4%	74.0%	70.6%	66.5%	68.0%
宇都宮市民であることに誇りを持つ人	40.8%	44.0%	44.0%	41.4%	42.1%

⇒宇都宮市には、宇都宮の伝統や文化について体系的に教える教材がないことから、早急に教材を作成し、児童生徒の指導に生かす必要がある。



宇都宮学の創設へ

(2) 「宇都宮学」創設

【基本理念】

自信と志をもち、ともに支え合いながら未来を担う宮っ子を育む

【目的】

グローバル社会に主体的に向き合い、よりよい社会を創る担い手となるとともに、異なる文化をもつ人々とともにたくましく未来を生き抜く宮っこを育むため、児童生徒が郷土宇都宮の歴史や伝統文化、産業などについて理解し、郷土への愛情と誇りをもてるようにする。

(3) 目標

- ①郷土宇都宮の歴史や伝統文化、産業などについて、体系的な学習を行うことを通して、郷土への愛情や誇りをもち、よりよい社会を創る担い手となるとともに、未来に向かって主体的に生きていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ②宇都宮の特色や魅力に関する事項についての知識を身に付け、郷土のよさを理解できるようにする。
- ③宇都宮に係る習得した知識を活用して、郷土の未来を考えたり、魅力を表現したりできるようにする。



- ④郷土宇都宮への愛情、宮っことしての誇りをもって、未来を切り拓いていこうとする実践的な態度を養う。

(4) 実施学年及び内容

【小学校（R 2年度～）】

基礎期 小学校 3、4 年生

★宇都宮のよさに気づき、親しむ

「社会科での学習」

- ・社会科と「宇都宮学」を関連付けた授業を行う。
- ・社会科副読本に「宇都宮学」と関連するコラムを掲載。

「宇都宮学施設めぐり」

- ・「宇都宮学」に関連した施設や場所などを見学し、体験的な学習を行う。

活用期 小学校 5、6 年生

★宇都宮のよさを理解する

「総合的な学習の時間」

- ・小学校版「宇都宮学」副読本などを使用して、探究的な学習を行う。
- ・過去から現在までのつながりについて学び、先人たちの思いや苦勞、知恵や工夫について理解する活動を行う。

【学習内容】

「宇都宮の自然と交通」

例) 宇都宮の場所・地名、宇都宮の自然環境、
宇都宮の生きもの、宇都宮の農産物、宇都宮の交通

「宇都宮の伝統文化」

例) 宇都宮の百人一首、宇都宮の唄と民話、
宇都宮の祭りと民俗芸能、宇都宮の伝統工芸、宇都宮の郷土料理

【中学校（R 3年度～）】

発展期 中学校 1～3 年生

★宇都宮の未来を考え、魅力を表現する

「総合的な学習の時間」

- ・中学校版「宇都宮学」副読本などを使用して、探究的な学習を行う。
- ・現在の宇都宮の魅力を発信したり、未来の宇都宮について考えたりする活動を行う。

【学習内容】

「宇都宮の歴史」

例) 宇都宮の幕開け、文武に秀でた宇都宮氏、城下町宇都宮、
戦災を生き抜いたまち宇都宮

「魅力あふれる宇都宮」



例) 大谷石文化が息づくまち宇都宮 大谷石をほる文化・大谷石を使いこなす文化、
スポーツのまち宇都宮、食と芸術が華やぐまち宇都宮

「未来へ羽ばたく宇都宮」

例) よりよい宇都宮を目指して、ネットワーク型コンパクトシティ、
誰もが住みやすいまち宇都宮、経済の発展と環境への配慮

(5) 探求学習

さらに学びを深めるため、自分たちで課題を決めて、その課題について調べていく
探求学習を4つのステップで行っている。

① 問いを持ち、課題を決める

日常生活や社会に抱いた疑問や関心から課題を見つける。

② 調べる・見つける

具体的な問題について情報を収集する

③ 整理・分析する

考えを出し合いながら問題の解決に取り組む

④ まとめ・表現する

考えや意見などをまとめて、そこから新たな課題を見つける。

(6) 授業を通して身に付けること

① 再発見＝優れたものを見出す（基礎）

⇒自分から「ある」もの「ある」ことを調べる



②協働＝それを生み出した精神に学ぶ（基礎）

⇒自分だけでは生み出せない多様な価値に出会う



③発信＝継承し発展させる（基礎）

⇒グローバル社会を生き抜く力を養うため、自分なりの「もの・こと」
との向き合い方を知る



郷土への愛情と誇りを持てる

(7) 多様な意見

【方針】全ての学校において、郷土への愛情を育む学習の充実を図る

⇒論点：授業としての導入（「資料集」ではなく、「副読本」として活用する）

主な意見の例

	意見の概要
学校 (学校長)	① 地域を題材とする各校の特色ある学習活動の時数減につながるのでは ② 総合的な学習の時間の本質が保たれるのか ・ 学校が目標や内容を設定 ・ 探求的な学習過程の充実 など
学校 (教職員)	③ 新たな学習についての指導に不安がある。
議会等	④ 各地区に関連がある人物や出来事などについて新たに検討することはあるか。(1人1人がもつ郷土への愛情)
市民	⑤ 副読本の販売の予定はあるか。

	対応や考え方
学校 (学校長 教職員)	意見交換会、校長会議により合意形成を図る ・ 社会科研究会など関係者への聞き取り、説明。 ①総合的な学習の時間で10時間程度実施する。(全市共通の学習内容を削減し、調整) ②③単元計画、指導案、授業用ワークシートなどは、市教委から全校にデータで提供する。 ②③担当者向けの研修会を実施する。
議会等	②④「副読本」は、宇都宮に関する幅広い知識を身に付けられるよう構成しているが、各地区の特色に対する深い理解は、各学校で題材を設定し、研究していくことが大切である。
市民	⑤市のホームページにPDFデータを掲載

(8) アンケート

宇都宮市「学習と生活についてのアンケート」肯定的回答割合(%)

※下線は、「宇都宮学」開始年度

①宇都宮の「よさ」を紹介することができる。

年	29	30	元	2	3	4	5
小6	70.1	71.4	72.4	<u>76.5</u>	78.0	76.4	79.1
中3	59.3	61.2	65.2	60.0	<u>60.7</u>	64.4	67.1

②他国の人々や文化について理解し、尊重しようとしている。

年	29	30	元	2	3	4	5
小6	—	—	—	—	—	83.0	80.8
中3	—	—	—	—	—	86.8	85.3

(B) 主な質疑応答

①宇都宮学の教材は何年かおきで改定を行うのか。

→ライトラインが通る前に作ったので、5年たつて今ちょうど小学校版の改訂を行っている。ただ、当初から5年程度を想定しており、次年度、中学校版も改訂を予定している。

②文化・歴史を伝える際に、特定のまちをピックアップしてほしいという要望等はないか。

→学習の枠組みをつくっているので、枠組みを大きく変える内容にしまうと、先生方の負担が大きくなってしまう。また小学校と中学校でつながっていくところのつながりも考えないといけないため、各地元のネタはいろんな方から要望はあり、検討はするが原則として大きな枠組みを超える取扱いは難しい。ただ、入れるべき資料は改訂でその都度検討していきたい。全面改訂はむずかしい。

③どれぐらいで作成したのか

→1年で作成した。一人の職員が2年で、小学校版、中学校版を1年ずつで、作成した。

④子どもたちへシビックプライドを持ってもらうことに関してどう整理すればよいか。

→考える余地がなければ授業としては、教え込みと言われかねないところがあり、知っていることが増えなければ考えることができないということを意識している。

⑤教材は学校の端末での利用も可能か。

→今回の改訂作業に合わせ、デジタル化を進める準備をしており、今後は端末で運用したいと考えている。

(C) 所感等

1. 郷土への愛情を育む「宇都宮学」について

学習指導要領(平成 29 年告示)

総則 第 3 章 教育課程の編成と及び実施

(2) 豊かな心や創造性の涵養

ウ 伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る個性豊かな継承・発展・創造のためには、古いものを改めていくことも大切であり、先人の残した有形・無形の文化的遺産の中に優れたものを見いだし、それを生み出した精神に学び、それを継承し、発展させることも必要である。また、国際社会の中で主体性をもって生きていくには、国際感覚をもち、国際的視野に立ちながらも、自らの国の地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重要である。

したがって、我が国や郷土の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それを尊重し、継承、発展させる態度を育成するとともに、それらを育んできた我が国と郷土への親しみや愛着の情を深め、世界と日本との関わりについて考え、日本人としての自覚をもって、文化の継承・発展・創造と社会の発展に貢献し得る能力や態度が養われなければならない。

出典：学習指導要領(平成 29 年告示)解説 総則編

この学習指導要領の改訂を踏まえて、宇都宮市教育委員会は、「グローバル社会の急速な進展」「伝統や文化に関する教育の充実」「宇都宮市民の郷土に対する愛着や誇りの醸成」を課題と感じ、郷土への愛情や誇りを育むことが必要、と判断するに至る。

そして第 2 次宇都宮市学校教育推進計画(平成 29 年度策定)では、基本目標 2「未来を生き抜く力を養う」ための基本施策(1)として、「グローバル社会に向き合い、郷土愛を醸成する教育の推進」を挙げ、重点施策・事業「郷土への愛情を育む学習の推進」として、郷土・宇都宮や日本の伝統や文化について理解し、郷土への愛情と誇りをもてるようにするため、宇都宮に関する知識などを「宇都宮学」としてまとめ、資料集を作成・配布して授業で活用する、とした。

しかし、実現化に向けた課題として、(1)宇都宮に関する知識 (2)資料集 (3)授業 について、それぞれ考えなければならない。

そこで、現場の小・中学校、教育委員会(学校教育課・文化課)、市長・議会も含む庁内関係部署のそれぞれでの工程を検討し、平成 29 年度から 3 年間のロードマップを作成・遂行し、令和 2 年度の 4 月から小学校 5・6 年生で授業が始まることになる。

まず最初に取り掛かったのは、郷土資料集「宇都宮学」作成の実施計画である。編集委員会の設立においては、監修者である外部有識者、及び委員長・副委員長である校長・副校長と、委員である教諭について、それぞれ候補者リストを作成し、協議を経て決定し、本人・所属長の了承を得て委嘱した。

そして、全ての学校において郷土への愛情を育む学習の充実を図る、との方針のもと、いかにして授業としての導入を進めるか検討する中で、資料集ではなく副読本として活用することが決まる。

地域を題材とする各校の特色ある学習活動が時数減につながるのでは、また、新たな学習についての不安がある、などの懸念が生じたが、意見交換会・校長会議により合意形成を図り、社会科研究会など関係者への聞き取り、説明を入念に行い、授業については総合的な学習の時間に10時間程度実施することとし、全市共通の学習内容を削減して調整することにした。また単元計画・指導案・授業用ワークシート等は市教委から全校にデータで提供すると共に、担当者向けの研修会を実施。宇都宮に関する幅広い知識を身につけるよう構成した副読本ではあるものの、各地区の特色に対する深い理解は、各学校で題材を設定して探求していくことが大切である、として、各校区での取り組みにも配慮。

こうした過程を経て、「自信と志をもち、ともに支え合いながら未来を担う宮っ子を育む」として、「グローバル社会に主体的に向き合い、よりよい社会を創る担い手になるとともに、異なる文化をもつ人々とともにたくましく未来を生き抜く宮っ子を育むため、児童生徒が郷土宇都宮の歴史や伝統文化、産業などについて理解し、郷土への愛情と誇りをもてるようにする」ことを目的とした「宇都宮学」が創設。児童生徒向けの教材として小学生版「もっと知りたい！宇都宮」と、中学生版「わたしたちがつくる！宇都宮」が作成された。

学習指導要領に合わせ、小学校「宇都宮学」を令和2年度から、中学校「宇都宮学」を令和3年度からスタート。小学校3・4年生では社会科の学習で従来の社会科副読本を通じて宇都宮のよさに気付き、親しむ。そして、小学校5・6年生で総合的な学習等で宇都宮学副読本「もっと知りたい！宇都宮」を使いながら宇都宮のよさを理解する。さらに中学校での3年間で宇都宮学副読本「わたしたちがつくる！宇都宮」を使って宇都宮の未来を考え、魅力を表現する。

これらの授業を通して身につけることは、

- ①再発見＝優れたものを見いだす、自分から「ある」もの「ある」ことを調べる
- ②協働＝それを生み出した精神に学ぶ、自分だけでは生み出せない多様な価値に出会う
- ③発信＝継承し発展させる、グローバル社会を生き抜く力を養うため、自分なりの「ものごと」との向き合い方を知るとの事である。

2. 久喜市教育委員会の全小中学校における「授業時数特例校」の取り組み

①ALL Kuki 教育改革プロジェクト

「子どもを育てるなら久喜市で 教育するなら久喜市の学校で」

三つの柱

- ①次代の世界で活躍する「未来を拓く力」を育む

- ②人とともに生きる「豊かな感性・尊重する力」を養う
- ③「絆を深め、地域社会と連携した教育」を推進する

「未来を拓く力」を育む実践の一つとしてアメリカ・ローズバーグ市との国際親善交流事業を1985年から開始しており、英語教育には特に力を入れている。早くから小学校全ての外国語の授業にALTを配置、市内小学生対象の「ENGLISH CAMP」開催、また英語検定受験料の補助を行っている。

(2)「久喜市版未来の教室」4 + 1 ←GIGA スクール以前に ICT 教育の取組を開始

- 1 時間・距離に制約されないオンライン教育の実施
- 2 客観的・継続的データに基づく個別最適な学びを提供
- 3 汎用的な能力を養う STEAM 化された学びを提供
- 4 統合型アプリケーションによる公務の効率化を実現

さらに+1として

ICT をこなしつつ、人間教師の良さを生かした学びのコーディネーターたる教師を育成

※文部科学省リーディング DX スクール（4 校）

(3)学びの STEAM 化から STEAM 教育、授業時数特例校について

平成 25-28 年度に久喜小学校が文部科学省研究開発学校に指定され、科学技術立国日本の持続的な発展に貢献できる「科学技術に親しみ探究・創造する」児童の育成を目指し、科学的リテラシー等の活用を核とする「夢創造科」（科学技術コース）を新設した場合の教育課程、指導方法及び評価方法について研究。

→プログラミング教育、STEAM 教育、教科横断型 PBL に向けた礎に

STEAM

Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学・ものづくり）、
Art（芸術・リベラルアーツ）、Mathematics（数学）

PBL

Project Based Learning（問題解決型学習）

- ・地域や企業等と連携して、社会とつながる問題解決的な学習を実施
（リコー、インテル、グーグル、アマゾン、理想科学工業、ダイソン等）

→これらの企業の協力があって可能

→エンジニアとしての動きを児童がトレース

- ・PBL 型の学びを通し、未来を拓くイノベーター養成へ
（アイロボット、ドローン、アーテックロボ、3D プリンター等の機器を活用）

- ・このような学校の学びの変容を家庭や地域に発信

授業時数特例校申請は令和4年度に市内2校からスタート、標準授業時数の1割を上限として、授業時数の弾力的な配分をする「カリキュラム・マネジメント（久喜小で研究済み）」→課題設定・解決を大人の側、教職員がまず実践

令和5・6年度には文部科学省「授業時数特例校」に市内全ての小・中学校が指定、探究的な学びの充実へ

- ・ICTを含む様々なツールを駆使して、各教科での学びをつなぎ、探究するSTEAM教育
- ・テクノロジーの善い使い手を育むデジタル・シティズンシップ教育推進他

たとえば、学校が避難所になった場合のシミュレーションを子どもたち自身が行い、課題の発見とその解決に向けて取り組むなど

- ・各学校ホームページに取組概要を掲載
- ・久喜市ジュニアプレゼンアワード開催、児童生徒の学びの発表の場づくり
- ・久喜市ジュニアICTリーダー育成講座（各学校のICTリーダーとなる児童生徒の育成）

(4) +1 教職員向け研修会

- ・Google for Education 教職員向け各種研修会の実施
 - ・新採用・転入教職員・育休明け教職員も受講→誰一人取り残さない研修体制
 - ・市内全校推進リーダー育成のための研究委員会組織
- 市内31校から各1名、推進力となる教員が参加
- 各校の中核となる教員育成、取組を全校で共有する仕組み
- 「久喜市版未来の教室研究委員会」ーデジタル学習基盤の授業改善
- 「未来の公教育研究委員会」ーGoogleWorkspaceを活用した校務DX
- 「STEAM教育研究委員会」ー探究的な学び、STEAM教育推進
- ・学校情報化認定に向けたチャレンジ（JAET 日本工学教育協会認定）

(5)教職員・子どもたちの Well-being に向けた教育 DX の推進

- 1 文部科学省リーディングDXスクール事業を活用した個別最適な学び
- 2 久喜市版教育ダッシュボードの構築を通じた教育データの利活用
- 3 教職員・子ども達の Well-being へ校務DXを通じた働き方改革の推進
- 4 授業時数特例校制度も活用した探究的な学びとSTEAM教育の推進
- 5 生成AIの授業と校務における活用を通じた実践と検証
- 6 学習・校務系ネットワーク統合ゼロトラスト構築、フルクラウド化
- 7 学校、家庭、地域、企業、行政が連携、共創し未来を拓く人財育成

3. 所感

栃木県の県庁所在地で、県内最大の都市でもある宇都宮市（人口 51 万人）の取組と、東京都市圏に属する埼玉県久喜市（人口 15 万人）の取組を視察。規模が異なる両市ではあるが、教育分野において自治体としての独自性を明確にして、地域の次代を担う児童生徒達を育成しようとする試みとして、非常に意欲的であった。

宇都宮市の「宇都宮学」は、小学校 3・4 年生の社会科の資料集を「宇都宮学」導入部分と位置付け、中学までの計 7 年間で「伝統や文化に関する教育の充実」と「宇都宮市民の郷土に対する愛着や誇りの醸成」を図ることこそが、「グローバル社会の急速な進展」に対する方策であると考えている。

率直に思ったのが、各学校ですすでに行われているであろう、地域を題材とする各校の特色ある取組との整合性である。これについては根回しを十分に行い、全市共通の学習内容を削減して調整、各地区の特色に対する深い理解は各学校で題材を設定して探究していくことが大切である、と明言している。「宇都宮学」をメインストリームとしつつも、既存の取組を否定するわけではない、という共通理解が必要不可欠と言える。

シティプロモーションにおいても先進地である宇都宮市は、様々な取り組みの中で、常に「宇都宮とは?」「宇都宮らしさとは?」という問いかけをし、いろいろな施策という形で回答しているようにも感じられる。

本市において「高松とは?」「高松らしさとは?」と問うた時、果たしてどれくらいの大人や子どもが答えられるのだろうか。高松育ちの小学 3・4 年生が手にした社会科資料集「高松の今とむかし」による学びは、各時代の各世代の子ども達の心に刻まれて、郷土への愛情や誇りとなっているのだろうか。また、教職員の側に、その重要性についての意識はあるだろうか、また、その導入に対する努力はなされているだろうか。もし、そのような方向性を聞いたときに現状では負担感のみが先行しないであろうか。もし疑問符が付くならば、本市においても「高松学」確立に向けての検討を進めるべきではないだろうか。

また久喜市の事例は、小規模自治体の実践例として非常に示唆に富んだ取組である。すでに英語教育に力を入れてきた久喜市にとっては、ICT 教育をいち早く取り入れるのも、また必然であったと思われる。そこで特筆すべきなのは、地域連携という、ある意味使い古された言葉を使うのではなく、「学校、家庭、地域、企業、行政が連携、共創し未来を拓く人財育成」と表現しているところである。

単なる学校と地域との連携ではなく、家庭や企業、行政も巻き込んだ連携と共創の必要性を説き、そしてそこから生まれるのは地域の未来であり、人財育成である、とするのは、久喜市に限ることではなく、本市にも言えることである。

同じように、校務 DX の目的が明言されており、教職員・子ども達の Well-Beingこそ

が目的であり、そのために校務 DX を通した働き方改革が必要、と明確化されている。校務 DX が単に教職員の働き方改革につながるのではなく、児童生徒の Well-being にもつながる、と喝破するところに、久喜市教育委員会の ICT 化に対する思いの強さが表れている。生成 AI の授業と校務における活用の実践と検討をいち早く取り入れているのも同様である。

本市の教育も進んでいるとの自負があったものの、この北関東の 2 市を視察して、全国を見渡せば、まだまだ、さまざまな非常に先進的な取組が行われていることが分かった。文部科学省のもとで義務教育が各自治体でなされているわけだが、実は各地域レベルの必要に応じて、様々な制度を利用すれば、ある程度融通が効くようになっていることがわかった。これらの見識を本市に持ち帰り、教育民生常任委員会をはじめとする議員活動を通じて、本市の児童生徒のために活かさなければならない、と痛感した視察となった。

以上